

音の散歩路

～次世代に伝えたい『日本人の心の癒し』を感じる 音風景の旅を楽しむ

－『残したい音風景100選』を訪ね歩く～

西野 紀子

日本名水百選、日本名湯百選、かおり風景、森林浴、棚田百選などなど百選シリーズはさまざまな分野にありますが、音にもあります。それが、「残したい日本の音風景100選」です。

これは平成8年（1996年）、環境庁（現・環境省）が、「全国各地で人々が地域のシンボルとして大切にし、将来に残しておきたいと願っている音の聞こえる環境（音風景※1）を広く公募し、音環境を保全する上で特に意義があると認められる100件を選定したものです。鳥の声やスズムシ、セミなど昆虫の羽音などの「生き物の音」から、奥入瀬溪流や那智の滝、鳴門の渦潮、琴引浜の泣き砂などの滝・川や潮騒などの「自然の音」、ねぶた祭りやだんじりの太鼓、阿波踊りなどの祭りや紙漉き、機織り、伊万里の焼物、寺の鐘音など産業に因む「生活文化の音」まで音風景の多様性がそのまま反映された内容になっています。その選定には、音環境を保全しようとする取組みに対する評価、音環境に対する人との関わり、日本の音風景の多様性が特に重視されています。

私は、名所・旧跡、人気観光スポット・グルメ、温泉などを案内する国内の旅のガイドブック作りや、温泉や散歩道、博物館などのムック本作りに30年近く携わっていますが、8年ほど前からカワイ音楽教育研究会発行のドリマトー

ンの会員誌『D&D』の連載記事「興味津々音を探して歩く」で、この「残したい日本の音風景100選」をポツポツ訪ね歩いて紹介しています。旅情報に関しての知識はあるつもりでしたが、まだまだ知らないこともあるもんだなあと取材するたびに感じます。現在約30箇所を踏破。まだまだ百箇所には程遠いですね。音風景だけでは物足らず、せっかく訪れたのなら近くの名所・名物もと欲張って、誌面ではこの音風景を目的とした日帰りや1泊2日程度の旅ガイド記事として掲載しています。旅の広がりも楽しいものです。旅人の想定は「この音風景を聞いて癒されたい！」と、思い立ち、電車に乗って旅するケース（少し時代遅れかな？）。だから必要以上に事前知識や情報は仕入れず、最寄り駅の観光案内所や地元の方たちから情報を聞きながら、行き当たりバッタリの取材をあえてしています。これが結構楽しい展開になります。地域性がよく現れている音風景ばかりなので、毎回新鮮な発見や再発見、驚きを感じ、自然やその土地に住む人々に感謝することもしばしば。やはり次世代に伝えて行かなければいけないと実感します。

●現地に足を運んでこそ実感できる音風景

「残したい日本の音風景100選」が選定され

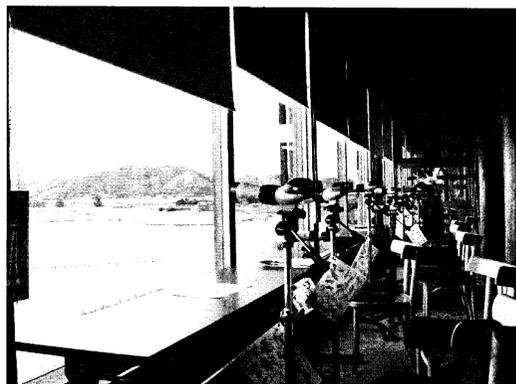
たのは20年ほど前のこと、その後日本の情勢は激動の時代を迎え地方の状況も幾分変化しているようです。地元の人もあまり認識していない音風景もありますが、違う形で生かされ、残ることで次の世代にとって価値が高まる可能性を秘めています。また、岩手県大船渡市の碁石海岸・雷岩や宮城県石巻市の北上川河口のヨシ原、茨城県北茨木市の五浦海岸など4年前の東日本大震災の影響を受けた音風景もあります。後々取材するつもりですが、とても気になります。特に北上川河口のヨシ原は津波による甚大な被害を受けましたが再生に向けて歩み出しているそうです。

ではいくつか実際に紹介してみましょう。

●市民運動によって守られた渡り鳥の集団越冬の地、米子市水鳥公園

「残したい日本の音風景100選」のリストのなかでも北海道鶴居村のタンチョウサンクチュアリ、山形県酒田市の最上川河口の白鳥、新潟県新潟市の福島潟のヒシクイ、鳥取県米子市の水鳥公園の渡り鳥など鳥関係は環境保全の立場からも多いようです。最近訪れた米子市水鳥公園は、ほうき 伯耆富士とも呼ばれるだいせん 大山をバックにした最高のロケーションにありました。

最寄りの米子駅に到着するとまずは観光案内所へ。すると、公園近く（実は徒歩分40分）に話題の鬼太郎列車が走るJR境線の駅舎があり



コハクチョウが集団越冬する日本南限の地でもある米子水鳥公園。水辺にはゆっくり野鳥観察できる居心地の良い観察ホールもある。

ました。この際鬼太郎ワールドが展開している境港へ足を延ばして、カニを味わうという観光ルートを妄想し、実行へ。

米子駅から車で約15分。米子水鳥公園は、島根県北東部にある入り海のなかのうみ 中海に面し、島根半島と鳥取県の弓ヶ浜に挟まれたせきこ 潟湖にあり、総面積約28ha、コハクチョウが集団越冬する地としては南限の地です。実は『日本書紀』や『出雲風土記』に登場しているほどコハクチョウと地元の人とのつながりは古く生活にも密接な関係があるようです。だからこそ中海干拓事業に伴う自然保護運動が盛り上がり、平成7年に公園が誕生。まさに市民が創った水鳥の楽園です。平成17年には、国際的に重要な湿地として公園を含む中海がラムサール条約登録湿地にもなった貴重な公園でもあります。

特に双眼鏡、望遠鏡がズラリと並ぶ観察ホールの目の前に渡り鳥が羽を休める池があり、10月～3月になるとコハクチョウだけでなく、カモ類、サギ類、国の天然記念物のマガンやオジロワシ、運がよければヘラサギなどが間近に観察できます。



米子駅0番ホームから出発し、境港まで約45分で結ぶ鬼太郎列車（JR境線）

「コハクチョウが逆立ちしていますよ」。「!?」。あわてて目の前の望遠鏡を覗くと水中に首を突っ込み水藻を食べているコハクチョウが…。円錐形の白いお尻がプッカリ浮かんでいます。「これから次々コハクチョウが飛来してきますよ。最大で1,000羽。でも、いつもここにいません。主に草食なので朝8時ごろ鳥根県安来の方に餌を求めて出かけ、夕方ここに戻ってきます。」と、笑顔でネイチャーセンター解説員の方が話しかけてくださいました。傍らでは何種類の野鳥が観測できるか競う中学生や、親子連れなど、いつでも誰でも自然や野鳥に親しめる憩いの場ようです。何だかんびりできます。「クォー、クォー」と鳴くコハクチョウの羽ばたきに耳を傾け、オナガガモたちの表情を観察していると時間を忘れてしまいそう。再び真冬の朝に、訪れてみたくなりました。

次なる目的地は妖怪漫画の祖・水木しげるの故郷、漁港・境港へ。ところが駅まで意外に遠く、道を聞いたある方が「無人駅ばかりで駅がわかりづらいから」と車で案内してくださいました。ありがたいことです。思わず地元の方の人情に

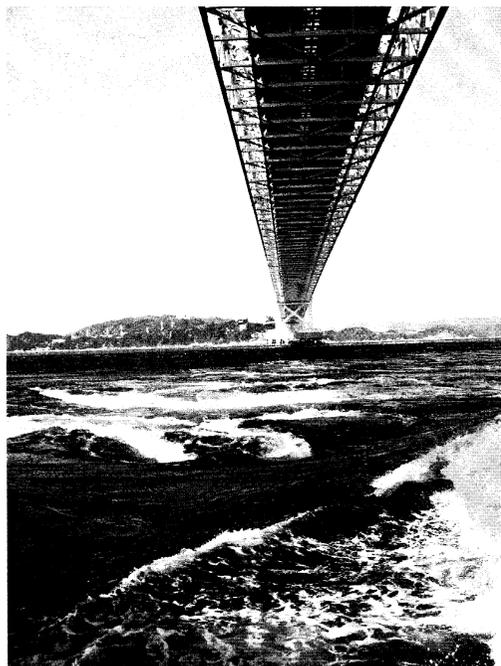


駅前にある水木しげるとゲゲゲの鬼太郎ブロンズ像。物語はここから始まる。水木しげるは12月に亡くなったが、あちらの国から鬼太郎たちのことを見守っているだろう。

触れて嬉しくなりました。鬼太郎列車（JR境線）にワクワクしながら乗り込んでビックリ。車体だけでなく座席シートにもねこ娘や鬼太郎のイラストがいっぱい。車内アナウンスは鬼太郎の声で案内されるのも感激です。

境港・鬼太郎駅駅前から約800m続く水木しげるロードは、飲食店や土産物店など妖怪グッズであふれていました。沿道の妖怪ブロンズ像は現在153体に増加。貸本時代の漫画や幻の名作の展示とその人柄にも触れられる水木しげる記念館は超人気スポット。

また、1日1,000トン以上の水揚げ量なら市役所に大漁旗が掲げられるという港街・境港は、主にマグロ、松葉ガニ、紅ズワイガニ、アジ、サバ、スルメイカなどの水揚げ量の多さが自慢。秋冬にカニは欠かせません。偶然入った食事処で「料理ができるまでどうぞ」と出された紅ズワイガニ1杯にビックリ。海鮮丼の切り身の分厚いこと！ 人情と気風の良さに感動!! 700種4,000点、日本一のはく製水族館・海とくらしの史料館も一見の価値あり。新鮮な水産物直売



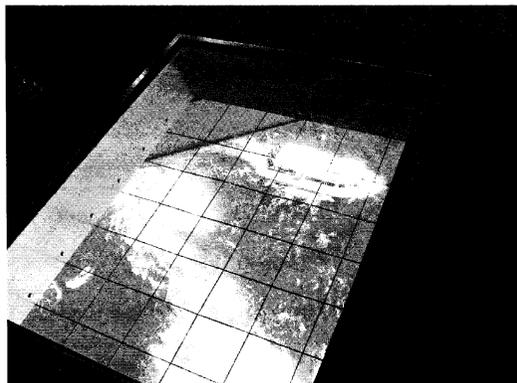
すぐ目の前で大きく渦巻く渦潮。次から次へと現れては消えてゆきます。

センターへもぜひ。この街なら妖怪たちも快適で楽しく暮らせるかも…。

●鳴門の渦潮を体感し、坂東で第九の里を知る

第九の里に遭遇、思いがけない出会いがあるのも旅の醍醐味。旅が楽しくなります。

音風景を訪ね歩いていたら偶然音楽関係施設に出会うことも多いです。茨城県の五浦海岸の波音で、海岸沿いを歩いていると童謡詩人の三巨匠と呼ばれる野口雨情記念館と生家に遭遇しました。『詩とは言葉の音楽である』と言わしめた雨情の生家は観海亭とも呼ばれた名家です。何気なしに少し足を伸ばした結果でした。その後津波による被害を受けましたが、資料の8割は無事だったとのこと（よかったです）。

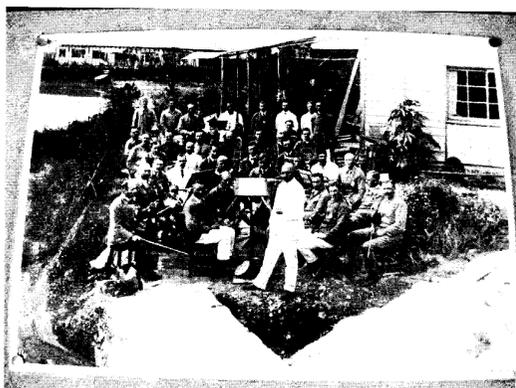


潮風を感じ、海の景観を鑑賞しながら四角い足元のガラス越しに渦潮が観測できる。大鳴門橋遊歩道「渦の道」。

全長1,629m、徳島県鳴門市と淡路島を結ぶ大鳴門橋。その橋の下をめざし、白波を蹴って猛スピードで船が進みます。小さな船からは「あっ。渦潮だよ」「あっちにも大きいのが…」と、歓声が上がります。

季節によっては最大直径が20mにもなる鳴門の渦潮。さぞかし、ゴウゴウと荒々しい轟音なのかと思いきや、エンジン音が響く船上ではそれどころではありません。『今度は右側に見えてきますよ』との声に、乗客は船の右へ左へと移動。『わああ』。目の前で、シュルシュルっと渦を作り、大きくなっては次々流されて消えていきます。あっという間の20分間ですが、まるで海上ショーのように楽しめました。

さて、この鳴門の渦潮は、世界的にも珍しく、いくつかの自然条件が必要です。ひとつは潮流の速さ。幅1,340mしかない鳴門海峡の潮流は、時速13～15kmで、春と秋の大潮時には最大時速20kmにもなるとか。これは、メッシーナ海峡、セイモア海峡と並び、世界三大潮流に数えられるほど。これに、特有の地形の変化と、潮の干満とが重なり、渦潮が誕生します。特に春と秋

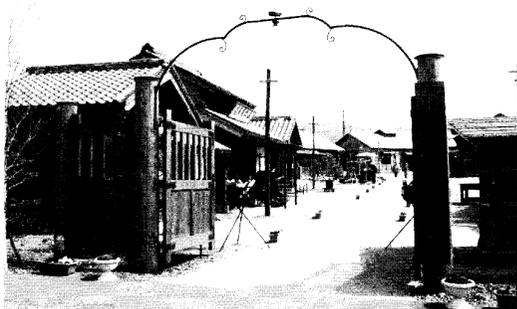


坂東俘虜収容所を再現した建物が並ぶバルトの庭では丁寧な説明もあり、周辺観光の案内にも応じてくれます。手作りの木製ボウリングも必見。

の大潮時には直径20mに達する渦潮となり、世界最大規模なのだそうです。自然の力は偉大です。

この渦潮観光船が発着する地は、JR鳴門駅からバスで20分ほどの鳴門公園内にあります。渦潮観光船のほか、鳴門の渦潮と大鳴門橋をテーマにしたミュージアム『大鳴門橋架橋記念館 エディ』と、大鳴門橋の一部（450m）を遊歩道にして、足元のガラス下45mに渦潮が観測できる『渦の道』は見逃せません。いずれも徒歩で巡れます。

さらに、ぜひ訪れたいのが鳴門市大麻町（旧板東地区）。ここは平和のシンフォニーとして有名なベートーヴェンの交響曲第九番が、アジアで初めて全楽章演奏された地です。演奏者は、第一次世界大戦中、日本軍が中国青島から俘虜として収容所に送ったドイツ兵たち。1917年（大正6年）から3年間、約1,000人が生活していた板東俘虜収容所は、人権を尊重した運営方針で所内に80軒もの商店やレストラン、印刷所、音楽堂、別荘群などがあり、複数のオーケスト



ドイツ館やバルトの庭では当時の演奏会を伝える写真や楽譜など興味深い資料が展示されています。

ラやさまざまな楽団が100回を超える演奏活動を行っていました。地元の人々との交流もあり、製パン、建築、西洋野菜栽培などの技術も伝えたのです。この史実は、2006年公開された映画『バルトの楽園』で、広く知られるようになりました。当時のドイツ兵俘虜の暮らしぶりや地元の人々との心温まる交流は、『鳴門市ドイツ館』や、収容所を再現したロケ地の建物の一部を移築公開している『バルトの庭』で詳しく知ることができます。あの時代に、この地で、なんてステキなことだろう…。と、驚きと感動で胸いっぱいになり『音楽って素晴らしい!』と感じました。

プロフィール

西野紀子（にし のりこ）

1961年生まれ。旅専門の企画編集プロダクションで国内ガイドブックを多数執筆。特に温泉は全国で100湯以上入湯。地元のおいしいものを見つけるのも得意。